

郷土博物館・文学館だより

第11回 渋谷現代短歌募集 優秀作・佳作発表

渋谷には、明治時代から現在に至るまで、多くの文学者が住み、近代短歌の発展に貢献してきた雑誌『明星』や『アララギ』も渋谷で発行されました。当館では、こうした渋谷の文学風土を継承し、区民をはじめ多くの方々に渋谷を再発見していただく機会として、年に一度、「渋谷」を題材にした短歌を募集しています。

11回目を迎えた平成22年度は、36名から127首が寄せられました。この中から優秀作5首、佳作4首が選ばれ、作品を書写した色紙は、当館と渋谷区役所中央エレベータ前ホールに展示されました。

5月11日には当館で表彰式が行われました。表彰者の中には、当館主催の文学講座「短歌をつくろう」で経験を積んで挑戦した結果、

受賞に至った方もいらっしゃいました。

平成23年度も10月から短歌の実作を中心とした講座を開講します。より多くの方の講座参加と「第12回渋谷現代短歌募集」への応募を期待しています。



表彰式に出席された入選者の皆さん

第十一回渋谷現代短歌く優秀作・佳作く

元聖徳大学教授 逸見久美選

〔優秀作〕

ランドセルゆらしつゝ家路急ぐ子に

道玄坂の夕日かやく (池田 俊子)

大雨に溢れしときは遥かなり

渋谷川いま地下を流るる (上田 国博)

明け方の空にオリオン見えるよと

渋谷の夜を働きし君 (北村 早苗)

夕暮れの渋谷駅前街路樹の

ねぐらに帰るセキレイの群 (竹内 貞雄)

故郷は渋谷となりし子ども達

夜のくらはきは知らず育ちて (本田 道子)

〔佳作〕

「これなあに」これはね好き爺爺ちゃんの

帰りを待つてるお犬さんだよ (大熊 順三)

想い出のレストランついに閉店す

松涛の一隅灯のなき寂しき (小林 晶美)

ハチ公よしっかりせよと吠えてくれ

日本を背負う若者たちに (宝迫 妙子)

炎の如き晶子の歌にあこがれて

渋谷に住めど吾が灯ともらず (横山 アエ)

うぐいすだに うめがめ 鶯谷遺跡から見つかった埋甕

鶯谷遺跡は、JR 渋谷駅から南に直線で約 500m のところ、渋谷川と目黒川にはさまれた標高約 32m の西渋谷台地上に立地しています。渋谷の地形は、北から幡ヶ谷・千駄ヶ谷・代々木・西渋谷・東渋谷の 5 つの台地から成り立っていますが、本遺跡はその西渋谷台地の、南西から北東方向にのびる舌状台地の先端部分にあたります。

本遺跡は、平成 19 年（2007）と 20 年に開発に伴う本格的な調査が相次いで実施されました。それらの調査では、縄文時代と弥生時代の竪穴住居跡が確認され、その数は縄文と弥生時代のものを合わせると 100 軒を越すほどにもなり、大集落であることがわかりました。

遺跡からは、竪穴住居跡のほかにも、縄文時代にみられる代表的な遺構として、埋甕も見つかりました。右下の写真は、ここで発見された埋甕のなかの一つです。

埋甕とは、竪穴住居内の出入り口に近いところに埋めた深鉢の土器のことや、それを埋めた施設のことをいっています。主に縄文中期後半の関東地方（縄文土器の加曾利 E 式の時期）や中部地方（曾利式などの時期）にみられ、後期になると中部地方では衰退し、関東地方のみ後期前半（堀之内式の時期）まで残るようです。

埋める深鉢には、口縁部が平らな土器が多く使われ、土器の底部を打ち欠いて孔をあけたものもあります。埋める方法は口縁部を上にして埋めているものや、土器を逆にして底部を上にして埋めるものがあります。

では、どうしてこのように土器を埋めたので

しょうか。これまでには、貯蔵施設として使ったものであるとか、死産した子どもやなくなった幼児の遺体を埋めたものであるとか、あるいは子どもを産んだ後の胎盤（胞衣）を埋めたものであるとか、諸説があります。

写真の土器は底部に孔をあけて、掘りこんだ穴の中に口縁部を下にして埋めています（発掘調査では掘った様子がわかるように、あえて半分に分けた状態で写真を撮影しています）。この土器は、中部地方を中心に分布する曾利系の土器で、口径 48.3cm、器高 59.4cm を測ります。これまで渋谷区で出土した縄文土器の中では、一番大きな土器です。また、土器の内部にあった土を自然科学分析したところ、ヒトなどの動物遺存体が埋納された可能性があるという結果がでました。

本遺跡では、これ以外の埋甕で、関東地方に分布する加曾利 E 式の深鉢を利用したものも見つかっています。同じ遺跡の中で、中部と関東地方の土器とが一緒に出土していることは、ここに住んだ縄文人たちの社会の仕組みを考えるうえで、貴重な情報の一つとなりました。



鶯谷遺跡第 1 地点の第 20 号住居跡で見つかった埋甕

白石実三と大正期の渋谷

国木田独歩の『武蔵野』の構想が、彼の渋谷居住時代に練られていたことは知られていません。そこで描かれた武蔵野の風景は、その後、どのように描写されてきたのでしょうか。

大正2年(1913)、一人の若い作家が、群馬県の安中から上京し、千駄ヶ谷に移り住みます。彼の名前は白石実三。代々木に住んでいた作家田山花袋の強い勧めによるものでした。

明治19年(1886)、安中に生まれた実三は、38年、早稲田大学の英文学科に進学します。この大学時代に田山花袋に師事するようになり、創作活動を始めます。43年に最初の作品「長兄」を『早稲田文学』に発表し、自然主義的作品を次々と作り出してゆきます。44年に志願兵として入隊した実三は、除隊後、郷里に戻りました。そのため花袋は安中の実三の家を訪ねて、上京を促します。こうして東京で生活を始めることになった実三は、坪内逍遙の紹介で富士房に編集者として勤務し、そのかたわらで創作活動を続けます。以後、博文館、早稲田出版などで、編集者としても活躍しました。

大正4年には、花袋の家から1kmほど西の代々木初台540番、現在の初台坂近くに居を移します(のち534番に転居)。このころ、花袋とともに武蔵野を歩いた実三は、郷土研究会「武蔵野会」の設立に奔走するなど、武蔵野に強い関心をよせます。そして6年には『武蔵野巡礼』

(大同館書店)、昭和8年(1933)には『武蔵野から大東京へ』(中央公論社)などの作品を刊

行します。実三は『武蔵野巡礼』の中で、自宅近くの改正橋からみた玉川上水を描写しています。「高井戸あたりでは完全な河川をなすその用水も、和泉で新上水を分つてからは、まったく廃却された残水路にすぎなかった。(中略)さうしてその腐れよどみ停滞した水面に私はおなじく自身の爛れよどんだ心をさながらに見ることがあった」として、新水路の建設によって荒廃した旧水路の様子に触れています。実三にとって、すでに周辺が宅地化され、京王線の「軌道が一直線にその左岸を縁りつゝ走ってみた」上水路は、息苦しかったのかもしれませんが。

しかし一方で、その岸辺に「夕陽の余滴に薄の穂がまぶしく光つて、白い野菊の花などもそのあひだを点綴した」情景を見出しています。昭和12年12月2日、消えゆく武蔵野の自然を愛し続けた実三は、初台の自宅にて52歳で亡くなりました。



昭和13年 初台駅付近
線路の手前は玉川上水の土手。右に改正橋の一部がみえる。

文化財紹介

区指定有形文化財（非公開）

「茶室花雲」 一棟（昭和初期）

（平成22年度 新指定）所在地 諦聴寺

棟高：3,536mm（11尺7寸）



（茶室花雲外観）

諦聴寺に所在する茶室花雲は、昭和三年（一九二八）に上野公園で開催された大礼記念国産振興東京博覧会のためにつくられた茶室と伝われます。昭和初期に活躍した数寄屋師・木村清兵衛（三代目）の作といわれ、その扁額には、近代の茶の湯文化を牽引した益田孝（鈍翁）の揮毫にかかります。花雲は、三畳台目・下座床で、にじり口と貴人口が併設され、水屋と腰掛待合が一棟にまとめられています。意匠的な特徴としては、大阪府の水無瀬神宮燈心亭（重要文化財）という茶室の「写」ということです。多彩な銘木・銘竹を組み合わせた吹き寄せ格天井、床脇の天袋や違棚の形態、台目畳の構成などに燈心亭の引用がみられます。木村清兵衛は、入手した材料を創意工夫して無駄なく活かすきる手腕に長けていたといえ、材料の仕上げや組み合わせ、天井や屋根の構成などに彼の作風が認められます。茶室を構成する材料は、京都産の小豆石を使った炉壇、桜の皮付き曲がり丸太による中柱、杉の落掛・床框、赤松の床柱、あすなるの柱、天井の銘木・銘竹などとなります。いずれの材料も、現在では入手困難で、希少で良質な材を使用していることに特徴があります。花雲は、三度の移築を受け、そのため造営当初の経緯は伝承にとどまり、確実な裏づけは得られません。しかし、近代の茶の湯文化の興隆において中心的役割を担った益田鈍翁と、著名な数寄屋師・木村清兵衛の関わりは確かです。花雲は、数寄者と数寄屋師が協同し、燈心亭という歴史的な名席を独自に解釈しつつ新たな茶室を作り出すという、近代における和風建築の展開を物語る上でも貴重な茶室といえます。

【今後の展示予定】

企画展「渋谷今昔物語

—田沼武能が撮り続けてきた渋谷—

平成23年8月6日（土）

～平成23年10月10日（月・祝）まで

企画展「家電に見る昭和の暮らしと渋谷」

平成23年10月18日（火）

～平成24年1月9日（月・祝）まで

白根記念

渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 9:00～17:00（入館は16:30まで）

休館日 ◆ 月曜日（休日の場合はその直後の平日）・年末年始

入館料 ◆ 一般100円（80円） 小中学生50円（40円）

小学生以下は無料

65歳以上の有 障者の場合は付き添いの方は無料

お問い合わせ ◆ 東京都渋谷区東1丁目9-1 TEL.03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.17

平成23年8月1日発行